日本ブルーノ・ワルター協会会報　第6号

昭和48年度前期研究用
録音資料刊行

1973年7月

〒166
[redacted]
編集発行人　菅　一

まさかワルターの伴奏が音になって残っていたとは、まさに、信じ難い事でした。殊に、ロッテ・レーマンとの協演は、録音が比較的良いので、二人のコンビが単に職業的だけのものではなかった事がよく判り、ロッテ・レーマンの、「ワルターの伴奏だと、とても唱い易かった。」と云う述懐を裏付けるだけでも、貴重な資料です。フェリアーの場合にも、会報第五号で御紹介した、ワルターのフェリアーに対する告別の辞の中で、初めて逢った時に、先ずシューベルトとブラームスの歌曲を、フェリアーがワルターの伴奏で唱った事実が記述されていますが、それを裏付けるかの様なプログラムである事が、私達に特別の興味を呼起して呉れるのです。

BWS一〇〇九　ドイツ歌曲集　（ピアノ伴奏　ワルター）
キャスリーン・フェリアー（一九四九）

(A)　シューベルト　若き尼僧。君こそは我が想い。君は私を愛して居ない。死と少女。「ロザムンデ」ロマンス。
ブラームス　我がまどろみは覚めがちに。死は静けき夜の如く。

(B)　ブラームス　文使い。永遠の愛。
ロッテ・レーマン（一九五〇）
シューベルト　セレナード。　ブラームス　子守唄
メンデルスゾーン　歌の翼に乗りて。　シューマン　言伝て

この一九四九年のフェリアーの歌唱は、米国ワルター協会が刊行した。シューマンの「女の愛と生涯」と同時にされたもので、この二枚は一対をなすものです。

ロッテ・レーマンの歌った四曲と共に、今まで私達には聴く術の無かった、色々な作曲家による小曲の、ワルターによる伴奏が聴かれるのは幸せな事です。殊に、「君こそは我が憩い」、「永遠の愛」「セレナード」「歌の翼」「子守唄」の様なポピュラーな歌曲など、

BWS一〇一〇　ベートーヴェン　交響曲第3番「エロイカ」
ワルター指揮　シンフォニー・オヴ・ザ・エアー
（一九五七・二・三）

トスカニーニ没後、程経ずして催された追悼演奏会に於ける、ワルターの実演録音です。宇野功芳氏は、他の追随を許さないフルトヴェングラーの最高の名演に、優るとも劣らないと評されました。トスカニーニの厳しい訓練を受けた元NBC・SOのメンバーだけに、アインザッツやスフォルツァンド、リズムの刻み方やメロディの唱わせ方、またハーモニーの響き等に、どうしてもトスカニーニ臭がつきまとい、ワルター特有の「外柔内剛」性は稀薄になりますが、より大きな擁包力を示し、一歩も退く事無く、この〝借物〟のオーケストラを、恰も自分の手兵の様に駆使して、それがはからずも、彼のスケールの大きさと、指揮技術の卓越性と、次元の高い芸術性を示す結果と成ったところなど、寔に「人類が生んだ最高の指揮芸術家」の名に価いする名演として、ワルターを敬愛する者として、御同慶に堪えません。無理をするまいと思えば、自らがオーケストラに引摺られ、自己を主張しようとすれば、オーケストラがついて行く事が出来ずに、自分が空転して了う指揮者が多い中で、夫々異ったオーケストラの特色を充分発揮させながら、尚且つ、自らのペースを崩す事無く、色彩こそ相違しても、瑞々しい演奏、次元の高い演奏を成し遂げる事が可能だった指揮者が、ワルター以外に果して居たでしょうか？

自分の手兵を、数十年も指揮し続ける事が出来る指揮者は、確かに幸せです。ワルターが、ユダヤ民族の血を受けて居たばかりに、安住の地を見出す事が出来ず、他の指揮者達が、居心地の良い自分の領地に永住したり、レベルがより高い同質のオーケストラへと、「昇進」を続けて、着々と経歴を豊富にして行く事の出来た指揮者とは違って、（若年の頃、ウィーンで、反マーラー党・反ユダヤ主義者達に迫害されたのは別としても）、ナチスがミュンヒェンで挙党して以後、アメリカの市民権を得て、ビヴァリー・ヒルズに居を構える迄、運命の荒浪に翻弄され、自分でオーケストラを選ぶ機会が相対的に限定されてしまった指揮者生活を余儀無くされ、外から見れば確かに不幸であったにも不拘、その不利を、寧ろ結果的には活用し、それに依って自らを向上させ、スケールを大きくし、芸術レベルを高め、異質のオーケストラをも抱擁し、自らの芸術をフルに発揮出来るという稀有の能力を身に付けた事は、偉大と言ってよいのか、何と言えば最も適切なのか、言葉の選択に苦労させられます。まさに、「転禍為福」です。それと云うのも、（勿論、楽天的な性格が、これを支えたのでしょうけれども）、ワルターは、実に「知・情・意」のバランスが良く取れていて、其の上に立って、「真・善・美」を一体のものとして追求する点に於て、どの音楽家をも凌駕していたからだと考えます。既に、会員諸兄から、感激と感動と感銘のお言葉が、多数寄せられています。ワルターは、女性的だとか、弱々しいなどと無責任な放言をする人々に、是非聴いてもらいたい、また聴かして上げたい演奏です。

コヴェント・ガーデンのオペラ（抄）

ハロルド・ローゼンタール

ウィーンの歌劇団の訪英中止、及びその振替上演に関する理事会の決定の結果、待望のシャルク及びシュトラウスの指揮は、ロンドンでは見られない事になって了ったけれども、副指揮カール・アルウィンと、ウィーン・オペラのメンバーとして訪英を予定されて居た歌手達の大多数とは、あらためて契約が結ばれたのである。其の中には、ロッテ・レーマン、エリザベート・シューマン、マリア・オルツェフスカ、エミール・シッパー、リヒアルト・マイール、アルフレッド・ヤーガーの名が挙げられる。けれども、ワルターが首席指揮者として契約されたのは、最も重要な事であった。

ワルターは、一九一〇年に催された最初のビーチャム・シーズン以来、ロンドンではオペラの指揮をしていなかった。その間彼は、

ミュンヒェン歌劇場の音楽総監督であった。けれども、一九二四年には、次の年にベルリンの三大歌劇場の中、第二番目の市立歌劇場の総監督に就任する事が予定されてはいたけれども、まだまだどの歌劇場にも、正指揮者としての地位に就く契約は出来ていなかったのであった。一九二四年のコヴェント・ガーデンの歌劇の配役には、ワルターは発言権を振う事はまだ出来なかったのだが、翌一九二五年から一九三一年迄は、毎年ロンドンで行なわれたドイツ・オペラ・シーズンの事実上の音楽総監督であった。ベルリンに於ける彼の地位のお陰で、此の両都市の間には、音楽上の密接な提携が行なわれ、一九二四年に生れたウィーン・オペラのメンバーとの関係を維持する為には、一九二五年以来ウィーン・オペラの常任指揮者の地位に居たロバート・ヘーガーを、コヴェント・ガーデンに於ける自分の副指揮者に任命すべきだと、ワルターは提言したのである。ワルター及びコヴェント・ガーデン当局者は、歌手に関するヘーガーの助言を尊重し、また事実ヘーガーとコヴェント・ガーデンとの関係は、ワルターとコヴェント・ガーデンとの関係より三年も長く続いたのである。

ワルターは、「タンホイザー」と「バルジファル」を除いて、殆んど全てのワーグナーの楽劇や、四曲のモーツァルトの歌劇、つまり「フィガロの結婚」（一九二六年にドイツ語で上演）、「ドン・ジョヴァンニ」（同じく一九二六年に上演。それを聴いた人達は、今でもその時の配役を、息をこらす様にして語り合う程に素晴らしかったが、その中には、ライダー、レーマン、シューマン、スタビーレが居た。）「後宮よりの逃走」及び「魔笛」、ベートーヴェンの「フィデリオ」、R・シュトラウスの「エレクトラ」と「バラの騎士」をも、コヴェント・ガーデンで上演した。それから、一九三〇年に上演したJ・シュトラウスの「蝙蝠」は、コヴェント・ガーデンを、まるでシャンペン酒の様に沸き立たせたのである。ロンドンのワーグナー崇拝者達は、気に入りのジーグリンデ（ロッテ・レーマン）とフリッカ（オルツェフスカ）が、ロザリンドとオルロフスキー公爵に成り、アルベリッヒ（エドゥアルト・ハビッヒ）とミーメ（ハインリッヒ・テッスマー）が、フロッシュとブリンド博士に成ったのを見た時、自分の目と耳を信じる事が殆ど出来なかったのである。但し、E・シューマンが紛したR・シュトラウスのゾフィーが、J・シュトラウスのアデーレに変身した事だけは、何とか容易に受入れる事が出来たのであった。

然し乍ら、此の時期に二十回以上も上演され、主として、レーマン、デリア・ラインハルト、シューマン、マイールという配役に依った「バラの騎士」こそは、最も深い印象を残し、その記憶は、人々の脳裏からいまだに消え去らないでいるのである。（註、協会会報第三号参照）

フリーダ・ライダー、オルツェフスカ、ラウリッツ・メルヒオール、ヘルベルト・ヤンセン、イヴァール・アンドレッセンが出演した「トリスタンとイゾルデ」及びレーマン、フリッツ・ヴォルフ、フリードリッヒ・ショル、ハビッヒ、オットー・ヘルガースが出演した「名歌手」も亦、人々はその記憶を楽しんでいるのである。年長のオペラ・ファンは、今でも懐旧の情もだし難く、当時の配役を語り合っているのである。

当時の演し物の大多数が、人々の昂奮を呼起し、音楽的に満足出来るものであったとしても、引続いて過去にとらわれると云う事は、一つの芸術様式としてのオペラにとっては馬鹿げてもいるし、有害でさえある。とに角、当時の演奏は、現代の新しい世代のオペラ・

ファンを満足させるであろうか？　音楽的には可能であろう。然し演出の面から言えば、不可能である事は確かである。

中　略

一九三一年のシーズンの後で、ワルターは、当局（プロイス大佐）の冷たい仕打を受けて、コヴェント・ガーデンを去った。ドイツ系の音楽家達に依るオペラは、質的にも高く、評判も良かったが、経済的には赤字で、財政難に困窮した当局は、次のシーズンにウィーン・オペラを招ぶに際し、（歌手達のギャラを大巾に引下げて契約し直し、また国内のオペラ界の関心を集中させる為には、同国人のビーチャム卿に指揮を委ねる事が一番だという結論に達し、彼を招聘したのである。けれども、その様な一連の出来事に就いては、ワルターを「つんぼ桟敷」に置いたばかりか、ワルター更迭、ビーチャム卿起用のニュースを、本人のワルターの耳には全然入れないでおいて、新聞社に流したのだった。一言の相談も受けなかったばかりか、直接の通告を受けず、ドイツの新聞の記事によって、この措置を知ったワルターは、当局へ抗議文を提出したのであった。この抗議文の内容は、音楽界では日常茶飯事である指揮者の更迭に対する異議ではなく、当局が本人に通告を怠ったばかりか、本人への通告無しに新聞社へそのニュースを流した事と、その結果、本人が新聞記事によって、自分に対する措置を知らされたという、誤った管理方法に対する抗議であった。一九三九年迄、ワルターとコヴェント・ガーデンの関係は正常化されなかったが、常時ワルターへの尊敬の念と友情を公言してはばからなかったビーチャム卿が、この七年間に、一度としてワルターを招聘するそぶりを見せなかった事は、悲しむに足る事であった。それにも不拘、一九六二年に、ゲオルク・ショルティが、コヴェント・ガーデンの音楽監督として就任を要請された時に、受諾する事を勧めたのは、外ならぬブルーノ・ワルターである。

ワルターを起用するに決ったのは、〝ウィーン・オペラ〟の訪英中止の結果であり、ワルターの更迭が、〝ウィーン・オペラ〟の訪英計画の結果であった事は、まさに奇縁と言えるだろう。

（編集子注。我が国では、戦前、戦中、戦後を通して、「ワルター」と言えばウィーン・フィル、ウィーン・フィルと言えばワルター」と言われていた時代がありました。そのワルターが、ウィーン・オペラの指揮を委されなかった事は、その様な観念を持った人々にとっては、奇異に感じられるでしょうが、当時のヨーロッパ楽界では、ワルターは、それ迄に、ミュンヒェン王立歌劇場やベルリン市立歌劇場の総監督であった人であり、ライプツィッヒ・ゲヴァントハウスの正指揮者であって、オーストリアと言うよりは、寧ろ「ドイツ」の指揮者であり、ウィーンと結びつけて考える人は少なかったのです。シャルク、R・シュトラウス、クラウス、アルウィン等がウィーンの指揮者だったのです。それから、二、三年の後に、ワルターがウィーン・フィルを指揮する様に成り、またウィーンの国立歌劇場の総監督に成ったのも、是亦、奇縁と言えるでしょう。）

（資料提供者、協会会員　[redacted]氏）

ベルリン市立歌劇場に於ける
ワルター（II）

ワルターの、一九二五年から一九二九年迄の、ベルリン市立歌劇場に於ける全上演作品と上演日とに就いては、会員[redacted]氏の御好意により、会報第二号でお知らせする事が出来ました。

此の度、松崎隆氏及び会員川上剛太郎氏の御好意に依り、その中三つの作品の主要出演歌手の名前が判明致しましたので、皆様の御参考に供します。

一九二五・一〇・一〇　ドニゼッティ「ドン・パスクワーレ」
マリア・イヴォーギュン、エルンスト・クラウス、グットマン、デジドール・ザドール。

一九二五・一〇・二六　R・シュトラウス
「ナキソス島のアリアドネ」
ロッテ・レーマン、イヴォーギュン、カール・マルティン・エーマン。

一九二五・一一・一〇　グルック「アウリスのイフィゲニア」
デリア・ラインハルト、マリア・オルツェフスカ、エーマン、エミール・シッパー。

ワルターの演奏会記録

「ベルリン・フィルハーモニー」

一九二四・一・一四（月）　モーツァルト・アーベント

1. 交響曲第四十一番ハ長調　K・五五一「ジュピター」
2. ピアノ協奏曲　変ホ長調　（独奏、ゲオルグ・ベルトラム）
3. 交響曲第三十九番変ホ長調　K・五四三

この本番は、一月十四日の午后七時半から行なわれたものですが、その前日午前十一時半から公開練習が行なわれました。故近衛秀麿氏は、その後者を聴かれましたが、氏は、ワルターの指揮は　此の日は殊に出来が悪かったし、ベルトラムは、音楽味に欠けた技巧家に過ぎないと評されました。

「ワルターの演奏時間」

（協会頒布録音資料、所要演奏時間、計時結果）

[redacted]

（京都府宇治市在住会員）

◎BWS一〇〇一
シューベルト　「未完成」　(1)一〇分三六秒(2)一三分三八秒三
J・シュトラウス　「ジプシー男爵」序曲　六分五四秒八
「維納の森の物語」　九分四七秒
「蝙蝠」序曲　七分一七秒

◎BWS一〇〇二
ハイドン　「奇蹟」　(1)六分一五秒　(2)五分三五秒
(3)四分〇九秒　(4)二分五三秒
同　「軍隊」　(1)六分五九秒　(2)五分二一秒二
(3)四分三二秒二　(4)四分〇九秒四

◎BWS一〇〇三
モーツァルト交響曲四十番　(1)五分五八秒四　(2)八分〇四秒四
(3)三分五五秒六　(4)三分五六秒六
J・シュトラウス　「ウィーン気質」　八分三三秒
「蝙蝠」序曲　七分二一秒三

◎BWS一〇〇四
チャイコフスキー　「悲愴」(1)一六分四七秒八　(2)七分一九秒

(3)七分五四秒　(4)八分三五秒四
モーツァルト　「コジ・ファン・トゥッテ」序曲　三分五九秒二
「イドメネオ」序曲　四分二三秒

◎BWS一〇〇五
ブゾーニ　ヴァイオリン協奏曲　二一分五八秒八
ブルッフ　ヴァイオリン協奏曲第一番ト短調
(1)十(2)　一五分三四秒四　(3)六分一九秒七

◎BWS一〇〇六
ハイドン「オックスフォード」(1)六分〇九秒四　(2)七分二七秒
(3)三分五八秒四　(4)三分一四秒八
ウェーバー　「魔弾の射手」序曲　八分一一秒二
J・シュトラウス　「蝙蝠」序曲　七分〇二秒四
モーツァルト　「魔笛」序曲　六分〇六秒

◎BWS一〇〇七
R・シュトラウス　「ティル」　一四分〇四秒八
「ドン・ファン」　一五分四一秒二
「死と変容」　二一分一四秒二

◎BWS一〇〇八
マーラー　交響曲第四番　(1)　(2)九分一六秒八
(3)二四分二一秒六　(4)八分四二秒

◎BWS一〇一〇
ベートーヴェン　エロイカ　(1)一四分三八秒六(2)一五分二〇秒四
(3)　五分三五秒　(4)一一分一六秒六

SP復刻盤の聴き方と私の音楽観

（長野県）　[redacted]

戦後に生まれ、SPも知らず、レコードを手にした頃はすでにステレオの全盛時代であった私ですが、そんな私がワルターを知り、その演奏にふれ、さらに大先輩の皆様とともにワルター協会の一員となっているとは、なんと幸せなことでしょうか。私は、ワルターをほとんどステレオ録音でしか知りませんでしたが、貫会のレコードを聴いて、よりいっそうワルターのすばらしさを認識いたしました。それと同時に、私達の世代にも、このワルターの芸術をしっかりと伝えて行かなくてはと、決意を新たにしたいです。まだ、十七才の私ですが、今後とも御指導よろしくお願いいたします。

× × ×

SP復刻盤の聴き方について、一言述べさせていただきます。会報第四号に、田原先生が書かれておられる事に関係がありますが、現在私にも、SP復刻盤の再生についていくつかのアイデァがあります。

まず、高音をカットするのには、私も反対ですが、倍音をカットせずにノイズだけ取りのぞく方法があるかどうかが問題になります。そこで、その方法を考えるには、まずスクラッチ・ノイズがどのようなものかを知らねばなりません。

もし、スクラッチ・ノイズが、比較的周波数分布のせまいノイズなら（例えば6ー74HZに多く分布しているなら）、その周波数の

みを減衰させるという手があります。これには、並列共振回路を、入力回路中にそう入するとか、直列共進回路でバイパスするとか、又は発振回路の負性抵抗を利用するとか、色々な方法が考えられます（いずれも無線通信に使用されている方法の応用です。）

次に、スクラッチ・ノイズが、かなり広い周波数分布を持つならば、〃位相打ち消し法〃とでも言いましょうか、ノイズだけを＋－0にしてしまう方法が考えられると思います。これも、無線通信に使用されている方法なのですが、これには、特性のよくそろったアンプが二台必要となります。さいわいにも、私達が使用しているステレオ・アンプは、左右二台の、全く特性の等しいアンプが用いられているのですから、この方法はかなり有望だと思います。具体的には、一台のアンプで音楽とノイズを、もう一台は出来るだけノイズ成分だけを取り出して増幅し、この出力をそれぞれ逆位相にしてスピーカーに入れてやれば、（又は、プリアンプの段階で行なっても良いかも知れません。）ノイズは打ち消されてしまうわけです。しかし、ノイズ成分だけを取り出す方法が、かなりむずかしいかも知れません。もし、どのレコードでもスクラッチ・ノイズは同じような周波数分布であるならば、他のレコードのスクラッチ・ノイズを使うというようなことも、不可能ではないかも知れません。この方法は、モノーラルのレコードを、マトリックス四チャンネルで実験中に、ノイズがフロントで消え、リアに拡散したことからヒントを得たものです。

いままで述べた方法は、いずれも素人考えで、専門家の方から見ればお笑いかもしれません。いずれにしても、スクラッチ・ノイズの周波数分布をオシロスコープで調べてみなければ、はっきりしたことはわかりません。が、私の感じでは、この種のノイズは、かなり広い周波数分布を持つようです。今年の夏休みにでも、ひとつ実験をやってみようと思っています。

さて、何か、技術談になってしまいましたが、実は、私はあまりスクラッチ・ノイズは気にしない方です。と言っても、もちろんノイズは少ない方がいいにきまっていますし、私も、ですから、プレーヤーには（他の部分以上に）、気を使っています。しかし、私たちは、あくまでも音を聞くのではなく、音楽を聴いているのです。その意味で、私はノイズなどの点で、あまり細かい点まで気をつかうのはやめにしたいのです。

音が無くても（悪いなりに）、テンポや間のとり方、その他音楽の他の重要な部分は残ります。私は、それを感じ取れば満足できそうに思うのです。それに、音楽に聴き入っていると、生理的フィルター効果（心理的と言った方が良いでしょうか？）によって、ノイズが耳にはいらなくなるのです。私がＢＷＳ一〇〇一の「未完成」を聞いている時がそうでした。第二楽章では、ワルターのすばらしい演奏にぐいぐいとひき込まれ、曲が終わるまで、後半の低音域のノイズに気がつかなかったぐらいです。（二回目は気にして聞いたので、耳ざわりでした。）とにかく、ノイズをさして気にならない時もあるというわけです。このことは、多くの方が経験なさっていると思います。

× × × ×

私は、まだ年少ですので（おそらく会員中最年少組にはいると思いますが）、音楽に対する感覚や考え方も、先輩の方々から見れば全くお話にならないのではないかと思います。それでも、私には私なりの音楽の位置づけがないわけではありませんし、音楽を愛し、ワルターを信ずる心にかわりはないと思っております。（少なくとも、そうなりたいと願っています。）

私にとって、音楽は人間の表面の感情だけでなく、より深い、かって人間だれもが持つ〃人間の心〃といったもの、あるいは、魂、精神と言っても良いかも知れませんが、その〃人間の心〃に訴えかけて来るものなのです。（断定的な言い方をしましたが、それほどはっきりと考えているわけではないのです。ただ、私の考えをしいて言葉に表わせばこうなると思うのです。）

だから、音楽は、他の何物でもない、音楽だけの芸術空間を形成しているのです。そして、その芸術が最高に高められた時、それは音楽を超えて、（他の芸術、例えば絵画等が、高められてそうなるように）、何かを訴える〃芸術〃にまでなる。（言葉が、うまくあてはまるものがないので、私なりに使いますが……。）

そんなふうに私は考えております。しかし、その一方、〃表面的な感情〃の面も、無視できません。音楽を聴くことによって、よろこびが得られるのも事実ですから。

そして、さらに私は音楽を聴いて、心を休める事もあるし、また音楽によって自分自身が高められるのを感じる時もあります。

私の音楽観も変わりました。数年（と言ってもせいぜい六年位ですが）前までは、二、三枚しかなかったレコードも、わずかの間にどんどんふえました。中学一年のころは、例えば、ベートーヴェンの第五なら、第一楽章ばかりを好んでいたのが、今では第二楽章の方が、ずっとずっと好きになり、未完成の第二楽章に感激するようになったのです。これからも、また私の音楽観はどんどん変わって行くかも知れません。でも、それらは（今までも、これからも）、ほとんどワルターによってもたらされるのです。

ワルターを知って、私はたいへん幸せです。

バッハやベートーヴェンやモーツァルトの作品が、時が流れ、政治や文明が変化しても、何十、何百年も愛され続けるように、ワルターの音楽も、人類が続く限り、人間の心を暖め続けてくれるものと思っております。そして、私もワルターの音楽を次の人たちにまで、伝えられるように少しでも力をつくせたら……と、そう思っています。

今から三十年もして、私が今の父の年と同じになるころ、ワルターの音楽が、多くのファンを持ち続けていたら、それほどうれしいことはないでしょう。

レコードの手入れについて

（東京都小金井市）　[redacted]

皆さんは、入手されたレコードをどの様にとり扱って居られましょうか。今回はレコードの手入れについてお話しましょう。特に昔の名盤を中古で買った時は必ず手入れする事が必要です。

一、ＳＰレコード

ＳＰレコードは現在製造されていませんから、すべて中古品です。コレクターから譲られた場合は、大事に扱われていたでしょうから大丈夫でしょうが、店頭で買った場合は、「かび」が生じている場合もあり、後に「かび」がしない様必ず手入れしましょう。「かび」は雑音のもとになりますが、一度「かび」がはえたものは元に戻りません。しかし放っておくと、どんどん拡がりますので喰い止めなければなりません。

「かび」とりはこれと云った決め手がありませんので、各人苦労

して色々な方法を試みています。(1)アンモニア水をガーゼに含ませて押しふく。(2)醋酸の稀溶液で同じ様にしてふきとり、水洗いする。(3)中性洗剤で洗う。(4)ジョンソンの硝子磨きシャワー・スプレイで磨く。等々ですが、私の実験では、(2)の醋酸が割にきれいにとれる様に思えました。しかし一種の薬品ですから、盤を痛めるという心配のむきには、(3)の中性洗剤が手軽でもあり、どこの家庭にもあり、ますし安全でしょう。私が実行している要領は、まず水道の蛇口に左手でSPの中心穴と外周をもって傾け、音溝に水を細く流しながら、右手に持った柔らかい布に中性洗剤をつけて、丁寧に音溝を洗ってゆきます。特に「かび」の所は何回も擦りましょう。この時、左手のレコードをすべらせて落さない様注意しましょう。洗剤は粉末でも液でもかまいません。片面終ったらサッと泡を水で流し、今度は裏を同じ様に洗います。洗い終ったら洗剤分が残らぬ様充分水洗いし、水を切って新聞紙を広げ、重ねた中にレコードを入れ水分を吸いとらせます。水を吸いとったら、乾いたクリーナーで磨きをかけます。水性オイルやシリコンで磨きをかけなくとも立派な艶が出ます。ここで注意しなくてはならないのは、手入れ済のレコードを持つ時に自分の指紋をつけない事です。例えばレンズふきの様な柔らかい布を用意して、常にその布でレコードを持つ習慣をつけ、やむを得ない時以外は、素手でレコードを扱わない事です。指紋と湿気が「かび」の素でレコードの敵です。完全にきれいになったらSPの紙袋に入れ、その上からLP用のビニールの外袋をかぶせ、外気と遮断させてからレコードケース等にしまいましょう。こうすれば、「かび」を防ぎ、良い音でSPレコードを鑑賞する事が出来ます。

二、LPレコード

新譜では最近シリンク包装した物も増えましたが、大部分はまだ開封包装で、検盤等でレコード店の人に指紋をベタッとつけられてイヤな思いをしますね。LPはSPのシェラックの様に有機物ではありませんが、それでも無機物のビニールにも「かび」はします。ですから買って帰ったら、すぐ水をかたくしぼったガーゼでそれらの指紋をふきとりましょう。

さて中古で欲しい盤を堀り出してきた時は、どうされますか？こびりついた糊等のよごれは、ベンジンで拭くととれる場合があります。ただ間違ってもシンナーは使わないで下さい。シンナーはビニールを傷めますから、元も子もなくなります。雑に扱われたLPは、音溝の中にゴミを埋い込んで雑音の原因を作っているものがあります。これらは水道の水をジャージャー流しながら、ガーゼ等で音溝を洗いましょう。過去にスプレーを多用して盤面がベトついている様なレコードは、液状洗剤で洗い流しましょう。あとはSPの時と同じです。レコード店での試聴でパチパチ云ったノイズが意外と無くなります。これは音溝の中につまっていた珪素質の硬いゴミがとれたからです。

それからプレー時に注意する事は、ホコリとりのためよくスプレーシャワーを使いますが、良い音質を保つにはスプレーシャワーを使わない事です。水道の水でかたくしぼったガーゼか水に湿らせて使用するクリーナーが一番よく効果的にホコリをとりますし、盤を痛めません。くれぐれも指紋をつけたり、汗を落したりしてレコードをよごさぬ様気をつけましょう。レコードはSPもLPも清潔を保つ事が永もちの秘訣ですから。

ワルター・SOAによる「英雄」

（東京都小金井市）　[redacted]

世に今世紀の五大指揮者という言葉がある。この五大指揮者とは、ワインガルトナー（一八六三ー一九四二）、トスカニーニ（一八六七ー一九五七）、メンゲルベルク（一八七一ー一九五一）、ワルター（一八七六ー一九六二）、そしてフルトヴェングラー（一八八六ー一九五四）の五人を指すのが定説である。成程トスカニーニ、メンゲルベルク、フルトヴェングラーといずれも非常に個性の強い大指揮者でワインガルトナーは穏健であるが近代指揮法を確立した功績は大きい。彼らに比しワルターは昔から大らかで温かい。ロマンな指揮者と言われ、そのレコードを聴いても一流である事は否定しないが私にはワルターがなぜ世紀の巨匠の一人であるのかよく理解出来なかった。それが数年前の某日、川上剛太郎氏宅でワルター、ウィーンの未完成実況のテープを聴かせていただいて成程ワルターはフルトヴェングラーやトスカニーニに比肩する大指揮者である事を遅ればせながら認識した次第である。ワルターも又実演において音楽を最高に燃焼させ実力を発揮した人である。そのダイナミックな力感、流麗な音の流れ、思い切ったアクセントの強調等はスタジオ録音のレコードではSPからSTに至るまで察知出来ぬ激情で、又ひどく男性的な演奏である。公演で力量を評価する欧米の人気は決して「うそ」ではなかったわけである。

さて、本題のワルター、NBCの英雄に移ろう。私はこれを聴いた時、背すじがズーンと寒くなり聴き進むにつれて胸が熱くなってくるのをどうする事も出来なかった。これはまさに希代の名演と云って良いのではないか！私はエロイカはトスカニーニ（一九五三年の実況盤）とフルトヴェングラーのスタジオと実況盤を愛聴し、特にウラニア盤は最高の演奏と信じてきたがこのワルターの実況盤は実にウラニア盤以上の名演と私は思う。さすがのフルトヴェングラーもこのワルターにはシッポをまいて逃げるのではなかろうか。こんなに感情の固りの様なエロイカの演奏は他に知らない。ワルターはどちらかと云うとベートーヴェンは不得手である。偶数はまだ良いが奇数は扱いかねている感じがしないでもない。その中で三番は奇妙に相性が良い様でモノーラルとステレオでも五、七、九よりは、はるかに良い演奏をしている。ゆえにトスカニーニの追悼にはもってこいの曲であろう。

まず第一楽章の出だしの全合奏の和音。これが何とトスカニーニの音そのものなのである。一糸乱れぬ瞬間に凝集する和音はNBC交響楽団が長年トスカニーニによってたたき込まれ身にしみこんだ音なのだろう。しかしその次には不安定なテンポに「おや？」と思ってしまう。トスカニーニ程ではないが早いテンポはワルターのものではない。主を失って指揮者なしでスタートしたシンフォニー・オブ・ジ・エア（NBC交響楽団）の自主性にまかせようか。手綱をしめて自分のテンポにもちこもうかと迷っている感じでオーケストラの方も又多少とまどっているふんいきがうかがわれる。しかし進むにつれてワルターは略々中庸の所に安定させ絶妙の捧さばきをみせはじめる。このエロイカと云う曲は演奏効果のある曲であるが、指揮者にとっても演奏者（オーケストラ）にとっても非常に難かしい曲なのである。絃部は小間切れの音の集りであり仲々に音の力感

と曲想をうったえる巨大なスケール感が出ないもので下手すると音にすき間が出たり、うすっぺらな感じになりやすいのであるがさすがNBCはワルターの棒についてどっしりした重量感の音を響かせてスキをみせないのは嬉しい。（ベルリンフィルにくらべてやや音色が明るいのはやむを得ない）。ワルターは一楽章からの盛上げを二楽章で爆発させる。トスカニーニと云う音楽の英雄を葬送行進曲で追悼するという意思があってかワルターはこの第二楽章に大きな山をおいている。こんな巨大で大火山の噴火の様な葬送行進曲は聴いた事がない。とどろきわたるティンパニーは怒れるトスカニーニもかくやと思わせる。しかしトスカニーニは実演でもこの様に強烈にはティンパニーをたたかせなかった。或いは、これはワルターがトスカニーニに対する哀悼の弔砲であるかもしれない。この辺の盛上げの表現はメンゲルベルクやフルトベェングラーと共通する点がある事は面白い。私はどちらかと云うとエロイカの装送行進曲は冗長にすぎてあまり好きではないのだが、この演奏ばかりは一気に聴き通してしまった。フルトヴェングラー程急変はしないが感情の動きと共に波が寄せてはかえす様にテンポが自在に伸縮し実に味の濃い演奏で聴く者の心をとらえてはなさない。遅いフレーズは哀しみに涙たたえて深く吐息をついている様でもある。天来の人間味がそこにみられ自然な感情導入からこの演奏は生けるが如く呼吸し生命がみなぎっている。追悼演奏という特殊な場故にワルターとしてもこの様な名演を成し得たのであろう。全くすばらしい！いやすごいの一語につきる第二楽章である。続く第三楽章は弦のせせこましい動きが終始するスケルツオであるが前の楽章で激烈な緊張を強いられたせいか逆に安らぎが感じられる。そして第四楽章はおとろえる事を知らぬ激しい気迫をワルターは音にそそぎながら偉大なるトスカニーニの回想と云ったしみじみとした味わいを持たせ音楽指揮の英雄をたたえて壮麗な締くくりを行なっている。ワルターはNBCの身についた音の構築美の中にロマンとトスカニーニとは又違ったダイナミックな力感と熱気とを吹込んでこの奇跡的な名演を成しとげたが今私達がはからずもこの一番勝負の名演をレコードで聴く事が出来るのは何と云う幸せなことであろうか。

それにしてもトスカニーニと云う人は没後十八日にしてワルターにこの様な追悼演奏会をして貰って幸福な人であると云わねばなるまい（フルトヴェングラーがニキッシュの追悼演奏会をした事は有名だが）。不幸にして私はワルターが亡くなった時、追悼演奏会が行われたと云う話を聴かない。ワルターの薫陶を受けたカール・ベームがウィーンフィルかコロンビア交響楽団（ニューヨークフィルも含めて）を指揮してジュピター等で追悼演奏会をしなかったものかと思うのは私一人であろうか。

「会員短信」

今回当協会で刊行しましたワルター指揮シンフォニー・オヴ・ヂ・エアーの演奏によるベートーヴェンの「エロイカ」は、爆発的な人気を呼び、数々の感動的なお便りを戴きましたので、その中の幾つかを選んで掲載させて戴きます。（敬称略）

（横浜市）　[redacted]

さて、今回の資料のうちの一枚である「エロイカ」ですが、これは私にとって待望の一枚でした。というのは、初めて私の好きなベートーヴェンが刊行されるということだけでなく、宇野先生の「ブルーノ・ワルター」で、この演奏についての批評を読んで、非常に期待していたからです。これまでに数多くのレコードを聞いてきましたが、こんなにもワクワクしながら針をおろしたのは初めてです。そして、次の瞬間のあの変ホの主和音から、もう私は完全に圧倒されてしまいました。ワルターのものすごい気迫（それもワルター流の気迫）に飲まれてしまった。そんな感じでした。終始強打されるティンパニ、ただひたすら荒野をかけぬけるかのような第一楽章、第二楽章の中間の凄絶とまで言いたくなるような悲劇的なフーガ、第三楽章のコーダのすさまじい追い込み、さらりと演奏しているにもかかわらず、何とも言えないすがすがしさの感じが満ちている終楽章のアンダンテ等々……。まさに「筆舌に尽くせぬ名演」です。時々聞かれるワルターのかけ声からは心身ともに充実しきった「八十才の青年ワルター」の姿さえ感じました。こんな演奏をしてもらったのだから、トスカニーニも安心して眠れたことでしょう。根本的な解釈の点では、後のコロムビアSOを振ったものと、それほどの差があるとは思えませんが、やはり、ワルターの、又すべての楽団員のおかれた状況が、こうした「切れば血が出る」ような演奏にしたのではないでしょうか。心のやさしいワルターのことです。心の底では、「トスカニーニ。なぜ死んだ!!」　そんな気持でいたに違いありません。ワルターのそうした感情は、あの葬送行進曲に如実に示されていると思います。

こんな演奏を残してくれたワルターには、我々感謝しなくてはいけませんね。私たち「ワルター教」の信者にとっては、これらの資料は「聖書」です。

（石川県）　[redacted]

BWS一〇〇九及び一〇一〇を受け取りました。たいへんに有難い限りでございます。

ワルターのピアノ伴奏の何と美しくニュアンスのあることでしょう。こんなにすばらしいピアノであれば、ピアニストとしても、じゅうぶん活動できたのではないかと、ただただおしまれることです。ピアノのテクニックはともかく、音楽としてすばらしければ、それでよろしい。私はテクニックはあまり問題にするほうではないので、音楽的に感銘深ければ、それで満足です。ワルターのピアノには、陰影があり、タッチがやわらかく、上品でエレガントで、淡くて、魅力があふれています。そしてこのような伴奏は、ワルターでなければできるものではない。ピアノ伴奏の録音が、これからもみつかることを念じています。

「エロイカ」も「エグモント」もすばらしく、美しい限りです。「エロイカ」のオーケストラは、元はトスカニーニのオーケストラであったことから、トスカニーニの色とワルター色の混色の調和などといわれていますが、私自身はこれがワルターのすべてだというとらえ方です。なぜなら、NYフィルの録音よりも、これのほうがはるかにワルター色が濃厚で、楽員もワルターの意図するところをしっかりつかんで、一生けんめいになっているところがうかがわれますし、トスカニーニの色はどちらかというと単色的でしたが、ワルターはこのオーケストラを使っても、決して単色的ではありません。いわゆるゲルマン民族独特の陰影の深い多色的でニュアンスのある演奏となっています。トスカニーニの色は、多少は顔を出して

も、それもワルター色での対比現象ですっかりワルター化してしまっています。これはどうみてもワルターの「エロイカ」です。
「エグモント」は、NY盤と何もかわっていませんが、ベルリン・フィルの方がゲルマン的で、ワルターに合っていると思います。

（東京都世田ケ谷区）

[redacted]

先日、第五回目の録音資料を受理いたしました。ちょう度、その翌日、我が家でMRK（三田レコード研究会）のベートーヴェン研究会が開かれましたので、その場で利用させていただきました。MRKとは慶応義塾大学の公認団体の一つで、会長に猿田憙先生、名誉会長に村田武雄氏を迎えて、会員各位間の交流と音楽知識の向上を目的に設立されているクラブなのです。私は、そのベートーヴェン研究会に属していまして、我が家で研究会が開かれたと言う訳なのです。私達は、創作年代順に交響曲と弦楽四重奏を中心に研究していまして、ちょう度その日は「英雄」の研究の日に当りました。「フルトヴェングラーの演奏で！」との声もありましたが、とかく「女性的」だの、「嫋々」だのと、表面だけをとって誤まって受けとられがちな〝ワルター像〟を正しく認識し直してもらいたいと思い、あえてこの演奏をとりあげました。私としては、この演奏は、ワルターの魅力に直接つながるものではありません。むしろ私としては、柔らかな表面の奥に、キラリと光る不屈の力強さ、精神力がうかがわれるのが、彼の最上の演奏だと思っているのですが、その強さが見過されて、柔らかさだけが云々されている傾向がある以上、あの「英雄」の演奏を通して、彼の再発見をしてもらおうと意図するのも、決して無意味とは思わなかったのです。

さて、演奏が終って、普通ならば作品論が始まるのですが、その日に限っては、演奏論に花がさきました。少なくともこれ迄抱いていたワルター像とはまったく正反対の演奏に、まったく驚いたというのが、おおかたの感想でした。その驚きが、感銘と結びついたのは言うまでもありません。特に第二楽章には、みんなたいへんに感動したとのことでした。なる程、管で現われる回想風のパッセージは、ワルターの得意とする所であるし、すばらしいティンパニーの強打、そしてこれもすばらしい彼ならではの、間のとり方など、数えればそのすばらしさは、きりがありません。ところが、ほとんど全員が異口同音にとなえた疑問点がありました。それは、スケルツォでのトリオのホルンの演奏法についてでした。宇野功芳氏は、彼の著書「ブルーノ・ワルター」の中で、〝トリオのホルンは、ワルター式の夢の様なレガートで、うっとりさせるのである〟と述べておられますが、私たちの考えは、むしろこのような好意的なものとは正反対なものでした。「あれだけの緊張力をせっかく持ち続けたのに……」と言うのが、その疑問でした。その緊張力との対比をねらった処理であったかもしれないとも思います。しかし、私たちには、普通のように力強く吹いてもらえたらと思いました。しかし、彼のような大指揮者が行なった処理ですので、何か私たちの気づかぬ必然性があるのかも知れません。ぜひとも、ステレオ盤、モノラル盤の解釈を研究して、そのあたりを探って見る必要があると思いました。

とにかく全曲を聞き終って、「思いもよらなかった演奏であった」というのが、おおかたのこの演奏に対しての印象でした。これを機会に、せめてMRKの人たちの中だけでもよいから、ワルターの本当の姿を理解し得る人が少しでも増してくれれば幸いだと思ってお

ります。

以上、ワルター協会の資料利用の報告をいたしたしだいです。

「珠玲仁雅」

※昭和47年後期刊行研究用録音資料の中、BWS一〇〇七のR・シュトラウス「死と変容」（NBC・SO）の録音日が判明致しました。それは、一九五一年二月二十四日です。

※「音楽新潮」昭和3年8月号に、ワルターがパリを訪問した時のコンサートの一つのプログラムが掲載されたのが、松崎隆氏の御好意により判明しました。

ベルリオーズ　「ベンヴェヌート・チェリーニ」序曲
マーラー　交響曲第四番ト長調
ストラヴィンスキー　ピアノと管弦楽の為の協奏曲
（ピアノ独奏、作曲者自身）
ウェーバー　歌劇「オベロン」序曲

作曲者自身がピアノ・パートを受持った協奏曲の演奏と、オベロンの序曲が殊の外出来映えが良かった事が特筆されています。

ここで気が付くのは、昭和三年は一九二八年であり、その年の五月に、ワルターはシャンゼリゼー劇場でモーツァルト・オペラ・フェスティヴァルを受持った事と、其の頃モーツァルト記念祭管弦楽団を指揮して、シューマンの第四交響曲とモーツァルトの「魔笛」序曲を録音した事です。8月号と言えば、六月末に原稿が〆切られ、また当時はヨーロッパから我が国へは、郵便（船便）は約一カ月かかった事を考えると、此のコンサートは五月中に挙行されたと推論出来ます。期せずして、前記モーツァルト・オペラ・フェスティヴァルと相前後して行なわれたと考えられます。そうすると、明記してはありませんが、管弦楽団はモーツアァルト記念祭管弦楽団だったかも知れませんし、今年二月十一日に八十一才の高令で他界された小西誠一氏（筆名松本太郎）からの情報では、フェステヴァルの管弦楽団はパリ音楽院管弦楽団だったそうですから、このコンサートの管弦楽団もパリ音楽院楽団だったと考えられます。また此の記事の送り主も、明記してありませんが、小西氏だったかも知れません。会員諸兄の中にも、此の様な資料をお持ちの方がおいでになりましたら、何卒御一報下さい。

※本年五月に、三修社より、オーストリア友の会編「ウィーン・フィルハーモニー」（輝く伝統）が刊行されました。当然、ワルターの名が発見されます。それによると、一九〇一年に、マーラーに依ってウィーン王立歌劇場に呼ばれたワルターが、初めてウィーン・フィルを指揮したのは一九〇七年であった事が判明しました。また創立者オットー・ニコライを記念して設立された、ニコライ基金コンサートをも、その年に指揮した事や、一九〇七年から一九五七年までの五十年間に、ワルターが、ウィーンやザルツブルクで、正式には百五十四回（実際にはもっと多い）のコンサートの指揮をした事も判明致しました。それから、ウィーン・フィルのブルーノ・ワルター時代に、それ迄はVPOとのつながりが殆んど無かったハンス・ブフィッツナーの名前が、VPOのプログラムにしばしば載る事が起り（如何にもワルターらしい、実力を持ちながらウィーンでは比較的馴染みの薄い旧友への友情の表現だと思われます）、それがVPOとブフィッツナーとの関係のはじまりとなり、戦後、ミュンヒェンの養老院からオーストリアへの移住を、VPOの首脳部が提

案し、貧しい生活から快的な晩年を送る事が出来る様になり、ブフィッツナーも、そのお礼として、自筆のオペラ「パレストリーナ」を献呈するという結果をもたらした事実も判明致しました。

※五月下旬、白水社は、ワルターの「音楽と演奏」（渡辺健氏訳）を刊行致しました。此の書物は、これ迄全訳が無く、津守健二氏訳（番町書房刊、非売品、日本コロンビア版「ワルター大全集」購入者に対する特典の一つ。）と西出美智子氏訳（LP手帳連載）の二種の抄訳しか無く、全文を読みたければ、アメリカのノートン社版の英訳本を読むしか方法が無かったのでした。白水社は、数年前に内垣啓一、渡辺健両氏訳に依るワルターの自伝「主題と変奏」を刊行した出版社なので、筆者は、同社刊行図書に添付された愛読者カードを記入、送付する度毎に、「音楽と演奏」の全訳を刊行する様に要請し続けてまいりました。遂に、この幻の名著が邦訳され、一般に発売される事になった事は、実に嬉しい事です。一人でも多くのワルター：ファン、並びに真摯な音楽愛好家が、此の含蓄の深い書物を熟演玩味なさり、ワルターの崇高な音楽観、豊富な体験に裏付けられた高邁な指揮・解釈法を正しく御理解下さると共に、深遠な音楽芸術の領域内で、一歩でも前進なさる事を、心から切望致します。

※パウル・ヴィットゲンシュタインと云えば、第一次世界大戦中に右腕を失った雙腕天才ピアニストであり、その卓越した才を惜しんだ数人の作曲家が、わざわざ彼の為に、左手の為の曲を作曲した事によって有名です。モーリス・ラヴェルは協奏曲を作曲し、戦前ポリドール・レコードに、ジャクリーヌ・ブランカールによる名演があった為に、此の曲とそのエピソードはよく知られていました。また、一九三九年にはコルトーによって録音され、そのSPレコードは、戦後我が国でも発売されました。（現在でも此のレコードは、GRシリーズで現役です。）その他、R・シュトラウスとプロコフィエフも、彼の為に作品を書きました。

パウルの父は、鉄鋼会社を経営し、ウィーンの億万長者でしたが（一家はユダヤ人の血を亨けて居ましたが、ヒトラーのオーストリア併合の後、ユダヤ人ぎゃく待が始まってからも、その鉄鋼生産を必要としたナチスは、ウィットゲンシュタイン家には目をつぶり、その為に娘の一人は、次々に連れ去られて行くウィーン在住のユダヤ人と一緒に、自分をも投獄して欲しいと抗議した事すらありました。）、学を好み、芸術を愛する気持が強い人で、パウルのみならず、子ども達は皆夫々才能と知性とに恵まれ、学問・芸術の諸分野に於いて名を成しました。その様な芸術愛好心の表われとして、十九世紀末から二十世紀初期にかけて、彼の邸は、ウィーンにおける屈指の「音楽サロン」となり、多数の著名な音楽家達が、彼の邸に出入りしたのです。

その常連の中に、グスターフ・マーラー、ブルーノ・ワルター、パブロ・カザルスの名が見られます。ワルターが出入りし始めたのは、恐らく、マーラーに依ってウィーンに呼ばれ、ウィーン王立歌劇場で活躍した一九〇一年から一九一二年迄の間であり、当時は両腕が揃っていたパウルは、ワルターの演奏を聞いた事でしょうし、またワルターも、パウルの演奏に耳を傾けた事でしょう。無関係である様に思われたワルターとヴィットゲンシュタインとの間に、此の様な結びつきがあったのです。

※判然とした月日は不明なのですが、三月か四月の或日、NHK・FMにより、午前九時の家庭音楽鑑賞の「音楽ABC」で、ワルターがバーバーに頼んで作ってもらったという「管弦楽の為のエッセイ第二番作品一七」（一九四七年）という曲が、ゴルシュマン指揮SOAに依って演奏され、放送されたそうです。この曲の感じからは、一寸ワルター向きの曲とは思えなかったそうです。（会員平高史也氏の御感想）。会員諸兄の中で、此の曲について、或いは此の曲とワルターに就いてのエピソード等を御存じの方がおいでになりましたら、何卒御一報下さい。また、ワルターが演奏した現代音楽に就いても、情報をお持ちの方は、御一報下さい。

※今年九月二十一日と、十月二十一日と二回に分けて、ワルターのモノーラル録音全三十枚が、CBSソニーから発売されます。これは、昨年秋に発売される筈だったのです。録音順による、十枚一組で、四組計四十枚という企画だったのですが、営業、販売関係から「売り難い」という批判がでて、企画練直しとなり、結局一枚千円で、全部バラ売りという形になったのです。ワルターのモノーラル全集は既に日本コロムビアから発売されたことがありますが、今度のCBSソニー版では、コロンビア版で抜けていたものが数曲取上げられているところが強味です。全巻購入される方には、二十一日頃布されると同時に、特典盤一枚（「第五」の最初の録音、古い方のNYPの「ジュピター」及び日本の愛好家へのワルターの挨拶）が無料で添付されます。

※CBSソニーから、音のカタログ「ブルーノ・ワルター」（YACC一三）が希望者には一枚五百円（梱包料・送料を含む）で配布されます。御希望の方は現金書留で左記へお申込下さい。

東京都港区六本木三ー十七ー七（〒一〇六）
CBS・ソニーレコード　クラシック課
ワルター音のカタログ係

※六月二日午后三時頃、近衛秀麿氏は脳出血で他界なさいました。著名な指揮者としての、氏の業績はさておき、氏は我が国では数少ない、ワルターの演奏を直接聴いた経験者の一人であり、いずれ、ワルター論をお聞きしたいと目論んで居ました。氏の御逝去は突然であり、また早過ぎた感じが致します。氏がワルターの演奏をお聴きになったのは、一九二四年から一九三〇年前後にかけてでした。つまり、ワルターがミュンヒェンの歌劇場の総監督の地位を辞し、暫くフリーの身であった頃から、ライプツィッヒ・ゲヴァントハウスの正指揮者時代にかけてでした。当時しばしばベルリン・フィルを指揮した事があったのです。氏のワルター論は、氏の著書「シェーネブルグ日記」で読む事が出来ます。謹んで氏の御冥福をお祈り申上げる次第です。

※東京都北区在住の会員、[redacted]氏は、お勤め先の音楽鑑賞部のレコード・コンサートで、ハイドンの「軍隊」交響曲を、ワルター指揮VPOと同COL・SOの両盤を御紹介なさって、会員諸氏に新旧両盤を比較検討する好機をおつくりになりました。

※[redacted]氏の玉稿「レコードの手入れについて」は、一見ワルターには直接の関係が無い様に思われますが、ワルターの演奏を聴く手段としては、99％以上、LP・SPレコードに依存して居る私

達にとって、その貴重なワルターのレコードを大切に取扱う事は、極めて重要な事です。出来るだけ長く、レコードの状態を良いものにしておいて、繰返し彼の演奏を聴く機会を多くする為には、それ相当の努力と配慮が必要です。其の観点から、貴重な御助言であると考えますので、特に若い会員の方々に熟読をお勧め致します。また、他にも良い方法を御存じの方がおいでになりましたら、御一報下さい。

※会報番五号は、二、三の資料提供者はあったものの、筆者の独演に終始した感がありました。第一号で述べました様に、定まったパターンは設定しない心算ですが、此の型はあまり望ましいものではありません。幸い、本号には田原氏をはじめとして、数名の会員諸兄からの御寄稿がありましたので、掲載させて戴きました。会報は限られた人達のみのものではなく、会員全員のものです。出来るだけ多くの会員諸兄が御投稿下さって、巾の広い、層の厚い、そうしてレヴェルの高いものにしたいと思います。活潑な御寄稿を期待して居ります。

※　昨年の晩秋に、「ブルーノ・ワルター」（レコードによる演奏の歩み）を刊行なさった宇野功芳氏は、現在「モーツァルトとブルックナー」を御執筆中です。今年九月に出版予定です。御期待下さい。

※今年六月にイタリーのトレヴィーゾ市で開催された「第一回世界レコード会議」に日本代表として出席なさった川上剛太郎氏は、御土産として左記のワルターのＳＰレコードの録音日に関する資料をお持ち帰りになりました。「ワルターの録音順ディスコグラフィー」に、訂正加筆なさいます様、お願い申し上げます。

「ブリティッシュ交響楽団」
モーツァルト　歌劇「フィガロの結婚」序曲　一九三二・四・一五
「ＢＢＣ交響楽団」
モーツァルト　交響曲第三十九番変ホ長調　一九三四・五・二二
「ウィーン・フィルハーモニー」
モーツァルト　アイネ・クライネ・ナハトムジーク
〃　一九三六・一二・一七
モーツァルト　交響曲第三十八番「プラーハ」
一九三六・一二・一八
モーツァルト　ドイツ舞曲　Ｋ・六〇五　一九三七・五・四
モーツァルト　ピアノ協奏曲二短調Ｋ四六六　一九三七・五・七
モーツァルト　交響曲第四十一番「ジュピター」
一九三八・一・一一
モーツァルト　歌劇「ティトス帝の慈悲」序曲
歌劇「ジァルディニェラ」序曲
一九三八・一・一五

ここで問題が一つ出来ました。今迄、ナチスに追われる前のワルターのウィーン・フィルとの協演の最後のものは、マーラーの「第九」であるという説がありましたが、小生は、マトリックス番号を根拠としてそれを否定し続けて参りましたが、モーツァルトの歌劇の序曲二曲が、マーラーの「第九」が録音された前日の録音である事が判明致しました。恐らく、実演録音のマーラーの「第九」は、既に時間を計って、二十枚のマザーの割当が終っていたのではないかと思われます。そこで、もう一曲のマーラーの「第五」アダージ

ェットの録音日が、未だに不明なのですが、このレコードの録音日をご存じの方はおいでになりませんでしょうか。これが、もし一月十五日の録音だとなると、「第九」が最後の録音という事になります。この点をはっきりとさせたいのです。何卒御協力の程、お願い申し上げます。

※宇野功芳氏は、「レコード芸術」増刊「レコードスペイス七二」一七一頁及び、「ＦＭファン」一九七三年五月二十一日号第四七頁で、私達の研究資料ＢＷＳ一〇〇二、ハイドン「軍隊」交響曲の出来栄えに言及して下さいました。御一読をお勧め致します。

※小林利之氏は、「ステレオ芸術」一九七三年五月号、よみがえる名演奏家たち（第一四〇頁）で、ＢＷＳ一〇〇三、モーツァルトの交響曲第四十番の出来栄えに言及して下さいました。第一読をお勧め致します。

※既に度々、ワルターに関する資料を提供して下さった森康吉氏は、戦後のワルターとウィーン・フィルの活動に関する資料をも提供して下さいました。此の号の割付けが終った終でしたので、此の欄で御紹介致します。

「一九五五・一一・四」
モーツァルト　交響曲第三十八番「プラーハ」
マーラー　「リンデの香りをかぐ」他二曲
マーラー　交響曲第四番　ト長調
（独唱　ヒルデ・ギューデン）

「一九五五・一一・一三」（午前十一時）
ブルックナー　「テ・デウム」
ベートーヴェン　交響曲第九番ニ短調
（歌手不明）　ウィーン国立歌劇場合唱団

※此の号の原稿受付〆切直後、西宮市在住会員[redacted]氏が、ワルターのパリに於ける活動に関する奏聴らしい資料を御提出下さいました。今までの不明だったジャック・ティボーとの協演によるソナタのリサイタルの記録も含まれています。次号の（九月刊行予定）トップ記事として掲載したいと思います。

※当協会では、次期刊行研究用録音資料の企画を、慎重に且つ懸命に検討中です。会員諸兄に「アッ」と驚いて戴ける様な資料を提供したいと専念して居りますので、御期待下さい。次号発行時期までには決定予定です。

※毎号お願いして居ります様に、当協会会報には会員諸兄の玉稿を掲載したいと思って居りますので、すばらしい資料や御研究の成果を御提供、御投稿下さい。そうして、次の様な関係を確固たるものにする事が出来るように、御協力下さいます事を、心からお願い申し上げます。

ワルター　↓　日本ブルーノ・ワルター協会　↓　会員諸兄